冬休み前に2学期振り返り

富士宮市内小・中学校で終業式

富士宮市内の公立小・中学校では23、24の2日にかけ、終業式を行った。各学校それぞれで新型コロナウイルス感染症対策を考慮して計画し、児童・生徒は2学期の振り返りと3学期への抱負を語った。

表彰を受ける5年生児童＝稲子小

富士宮市立稲子小学校（高橋清隆校長）では、換気をした教室に全校生徒12人を集め、一人一人距離を保って実施した。

高橋校長は同校の校旗が新しくなることに触れ「古い校旗は長い間皆を見守ってきた」と述べ、「校旗だけでなく多くの人が見守ってくれている。12人全員が元気に過ごせたのは、周りで見守ってくれている人のお陰でもある。大みそかには『一年間ありがとうございました。よいお年を』と、お正月には『明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします』と、どちらも感謝の気持ちを込めあいさつしましょう」と語った。

校旗を掲げる教諭ら

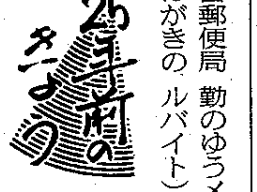
2学期に頑張ったことを発表する3年生児童

冬休み中の生活については『こうゆうすいか』をキーワードに▽交通事故▽誘拐▽水難事故▽火事―に注意するよう呼びかけ、長期の休暇になることから家族とのふれあいの時間を持つよう促した。

また、今年度から一人1台給付されたクロームブックについて、2学期中に保存した勉強内容の見直しやタイピングの練習、デジタル教科書や動画を見て3学期の予習などができることを説明し、注意事項として長時間使わないこと、姿勢よく使うことなどが伝えられた。

児童らは2学期の振り返りとして、運動会や持久走記録会、学習発表会、算数の授業など自身が頑張ったことを一人ずつ発表したのち校歌を斉唱。高橋校長から各賞の表彰状が手渡され、冬休みを迎えた。

○…富士宮郵便局勤のゆうメイト（アルバイト）80人が投入。年始では、年賀はがきの仕分け作業がピークを迎えに間に合うよう仕分け作業た。15日の受け付け開始から10日間で配達分70万枚が届いており、内が急ピッチで行われた。



手話の学び成果披露

富士宮市 奉仕員養成講座が閉講

富士宮市主催の手話奉仕員養成講座（入門課程）の閉講式が22日、富士宮市役所で開かれた。講座の最後は受講生が講師と共に手話劇で約8カ月間の学びの成果を披露した。

同講座は今年5月に開講。市民ら16人が基本的な手話を学び、聞こえない人たちとのコミュニケーション方法を体験することで聴覚障害や手話について理解を深めた。

最終回は、4つのグループに分かれ、意見を交わす方法を学ぶため、ろう講師と発表内容や配役を決める話し合いを手話で展開。その後、各グループが『桃太郎』など昔話をベースにした劇を披露し合い、笑いを交えた発表を楽しんだ。

受講生は「基本を学ぶことでさらに深く手話を学びたいと思った。最終的には手話サークルに参加して、耳の聞こえない人たちとたくさん話がしたい」と話していた。

手話劇を披露する受講生ら

「マスマス元肥」活動

環境大臣表彰（奨励賞）に輝く

富士宮高校会議所 須藤市長に報告

富士宮高校会議所（山田美月会頭）がこれまで取り組んできた『マスマス元肥』に関する活動が、気候変動アクション環境大臣表彰の奨励賞・気候変動アクションユース・アワード賞に輝き22日、山田会頭らが富士宮市役所を訪れ、須藤秀忠市長に受賞を報告した。

『マスマス元肥』は、富士宮市が生産量日本一のニジマスについて調査する中で、加工食品にする際に頭や尾れなど残さが残ることを知り、その活用方法を発案したもの。富士バイオテック株式会社の協力により、ニジマス残さと朝霧牛のふん尿のコラボたい肥として2020年に誕生した。その後、同たい肥の活用方法を考え、今年は野菜の育成、育てたサツマイモを利用した富士宮市の新たな名物菓子を考案するなど、活動を発展させてきた。

受賞報告する富士宮高校会議所メンバー

同賞は気候変動の緩和および気候変動への適応に顕著な功績のあった個人・団体に対し、その功績をたたえるもので、富士宮高校会議所は、高校生が『マスマス元肥』の活動を通し、持続可能な社会づくりに貢献したとして評価を受けた。

報告では山田会頭が経緯を語りながら、「広報や資金集めのためのクラウドファンディングにも挑戦した。また小学生を対象にしたSDGs自由研究講座、2回目のSDGsコンテストなどが評価されたと思う。先輩からの継続活動が評価されてうれしい」と述べた。

また、2年生のリーダー・吉村未夢さんは、「東京ビッグサイトで開かれた表彰式に参加し、他の活動なども聞く機会になった。また新たな持続可能な社会づくりに向けて活動していきたい」と話した。

須藤市長は「コロナ禍で十分な活動ができない中、工夫を凝らしてさまざまな行事に取り組んでくれた。今回の受賞も、持続可能なまちづくりを目指す富士宮市にとって誇りとなる。この活動を絶やすことなく、高校生ならではのすばらしい発想で富士宮市に元気と活力を与えてほしい」と称賛した。

随想

師走のノスタルジー

吉野 富士男

12月7日は二十四節気の大雪、22日は冬至。今年の暦も少なくなった。12月は母の命月だから何か必ず想い出すものがあり、あれこれと思いを巡らす。

記憶を辿り一気に75年くらい前まで行き着くと、敗戦による急激な食糧難の時代の景色が蘇った。食卓にあれこれの品が並ぶことは無く、単品で腹を満たした。麺類が主であったと思い出す。うどんもあまり白くなく蕎麦と併用しての主食であった。麺を作る母のそばに居て出来る事の手伝いをした。蕎麦の折は延ばした板状の端を少し切って焼いて口に入れてくれた。そんな想い出が頭をかすめた。

親しい人の家で毎年年越しの蕎麦をたくさん打つ。数年前に昔の話をして1玉の蕎麦を延ばして仕上げたところ、「お前は口ばかりでない」と言われたことがあった。門前の小僧でも度重ねれば会得するものだ。

敗戦後75年も世の変遷を見て生き長らえ老いた。新民族が誕生した中に置かれているような気がする。カタカナ語が会話や新聞、テレビの中でも多くなって半分他国の感覚。柳家小三治さんが生きていたら落語の枕の小話に「デモクラシー・どこにあるでしょうかね、デモで暮らしていく人たちですかね」とあのとぼけた顔で言いそうな気がしてならない。

デモクラシーとかヒューマニズム等簡単に口にする人が多くなった。老体でも耳の働くうちは耳学問が発達して新民族の仲間に知らず知らずのうちに入っていた。昔、師の一人で日本語を大切にしていた人があり、俳句を例に挙げて「これを外国語にしてどうなる。わび・さびなんて消えてしまう」と言っていた。それに賛成したが、生きていくためにカタカナ語を少しばかり必然として生き長らえて八十路です。

トゥイヤー　ラストスピーチ・メリーXマス　アンド　ハッピーニューイヤー・グッドラック。

（富士宮市小泉）